

6 双鶴 江崎栄造・江崎栄一 一点

昭和三十六年(一九六二)
玳瑁、木 総二五・〇×四四・〇×三二・〇

ウミガメの一種である玳瑁(タートル)の甲羅で作られた鶴の置物。木胎の上に、玳瑁の透明度の高い黄色の部分貼り合わせて軀を作り、尾羽や脚には黒い部分を使い分け、金線の象嵌や螺鈿で装飾している。玳瑁は古くから黄と黒の模様や半透明という特性を生かして、工芸材料として用いられており、鼈甲細工とも呼

ばれている。本作は昭和三十六年に両陛下が長崎へ行幸啓の折に長崎市から献上された品で、両陛下の長寿を願う吉祥意のほかに、長崎港が「鶴の港」と称されるのになみ、長崎港ご訪問の記念に、との意味も含まれている。作者の江崎栄造(二八七八―一九六五)は、長崎において鼈甲細工に携わり、皇室に關係した作品を数多く手がけている。本作は息子栄一との共同制作である。

7 鶴巢籠手焙

五代清水六兵衛 一点

昭和八年(一九三三)
陶磁 三二・五×七〇・〇×二七・五

丹頂鶴が卵を暖めている姿を、そのこんもりとした量感を活かして手焙としたものである。このモチーフは五代清水六兵衛(一八七五―一九五九)が得意としており、同形状の香合をほかにも見ることができ、鶴の巢籠をモチーフとした香合といえば、初代清水六兵衛にも銕絵をほどこしただけの素朴な作例がある。また、野々村仁清の



国宝「色絵雉香炉」(石川県立美術館蔵)をはじめ、古清水など初期京焼にも種々の動物や鳥の姿を模した彫塑的な作例があることから、本作はそれらの京焼の伝統を受け継いだものと見なせるだろう。

五代清水六兵衛は幸野棟嶺に絵画を学び、京都府画学校卒業後、父・四代六兵衛から製陶術を習得して伝統ある陶家を継いだ。大正期から昭和前期を通じて京都陶芸界の中心的存在であった。昭和八年、京都府知事より献上の品。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やぶござれ ― 寿ぎの美・新春に集う

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年一月六日発行

©2007, The Museum of the Imperial Collections